国立音楽大学附属図書館主催

《朗読の楽しみ》　第２回

2011 年 11 月 18 日（金）17:15～19:15

図書館２階　自由閲覧室

プログラム

１．主催者挨拶・講演者紹介
２．講演
３．朗読:「夢の縺れ」「音もなく雨が……」「哀しい春」
４．演奏: 歌曲「哀しい春」
５．朗読:「不在になった私の」「晩秋の日に」「旅立ち」
６．演奏: 歌曲「旅立ち」
７．音楽を聴いての感想、詩人の側から見た「歌曲」について
８．演奏家、参加者感想、フリートーキング

清水茂（しみず・しげる）氏　プロフィール

詩人、フランス文学者。1932 年東京に生まれる。1956 年早稲田大学文学部仏文科卒業。現在、早稲田大学名誉教授。翻訳・評論・エッセイ・詩・画筆と多方面での活動をおこなう。「同時代」編集代表。現代ポイエーシス賞、日本詩人クラブ賞、埼玉詩人会賞受賞。日本詩人クラブ会長

演奏　メゾ・ソプラノ: 湯川亜也子（国立音楽大学大学院　博士後期課程修了）
　　ピアノ: 福田久美（国立音楽大学大学院　修士課程１年）
作曲: 藤井喬梓（国立音楽大学准教授）

（企画・図書館委員会、進行・沼口隆）

《朗読の楽しみ》〔於国立音楽大学附属図書館〕
清水茂詩篇

夢の縺れ

夢のことを書いているのに
いつのまにか　夢のなかで書いていた。
私が書いているもののなかで
誰かが私に言った、「ほら
　あそこに見えるでしょう、夢が？」
言われるままに振り向くと
私にも夢がみえた、私は見ているのに
見えている風景のなかにいた。
「どうです？　同じ夢でしょう？」
そうだった、私たちは同じ斜面を
同じ足取りで進んでいた。
ところで私たちは登っていたのか、
それとも下っていたのか、何処に向って？
光は射しかけていないのに
あたりはとても明るかった。私たちは
並んで歩いているのにとても悲しかった。
別れなければならないことを知っていたからか、
だが　それは夢の外のできごとなのだと
私たちははやくも知っていた。
「それならば、この夢のなかから
　出ないようにしましょう。そうすれば
　私たちは別れずに済むのだから。」
私はそう言って　振り返った。
いつまでも「私たち」と言っていたかった。

そこには誰もいなかった。
それは夢のなかだったからか、
それとも夢の外だったからか。
繁みの何処かで鳥が啼いていた。

轉りというのか、それとも
あれは叫びだったのか、もう消えていた。
言葉に似ていたが、言葉ではなかった。
それが終ると世界は水底の
寂かさのなかに沈んでいった。

音もなく雨が……

久しく見ないままにも　遥かな何処かに
まだそれはあるのだと思うとき
私たちはなお望みをもちつづけてもいられるが
ふいにそれがもうないのだと知ったとき
心は鈍色の悔恨に閉される。
それでもなお希望を繋ぎつづけるためには
ここから見える空の彼方に
べつのひろがりを想いつづけ、そこにこそ
失われたものは在りつづけるのだと
自分に言い聞かせたりもするが
それが思い違いかもしれないという疑いは
いつも執拗に心に付き纏って離れない。

私たちがこんなふうに望んだり
疑ったりするのは　いったいどうしてなのか。
かつて慈しんだ何ものかを、誰かを
自分がすっかり忘れてしまいはしないかと
懼れているためででもあるのだろうか。

けれども　そのために　いま、ここで
私たちが目にするさまざまなものたちを
ときに私たちは何と疎かにしていることか。
窓に音を立てるでもなく降っている雨の
濡らしている木の枝先で　小鳥が鳴いている。

寒さが近づいてくるのを感じて
すこし震えているようにも見える。ほどなく
何処か遠方に立ち去ってゆくのかもしれない。
そんな小鳥の囀りを上手に真似してみせた
幼いひとりの子どもの笑顔を想い出す。

哀しい春

雪や霙が降り止んで　いまは
崩れかけた崖の上の杏の樹に白い花が咲いている。
雪片がそのままに纏わりついたのか、
呼び起そうとする想い出は
なぜかこの春　虚ろのように哀しい。

樹の下でいつも遊んでいたあの子どもの姿は
何処にゆけば見られるのか、
花の枝間で一羽の鳥が啼いている。
波の上の陽のかがやきは明るいのに
なぜかこの春は虚ろのように哀しい。

過ぎ去った日ほどにも遠い何処かに
あれやこれやの想い出すべてが
流れ去ってしまったために　枝間の鳥は
虚ろのような春の光のなかで
せわしげに誰かを呼びつづけている。

不在になった私の

ほどなく終ってしまえば
もう何もなくなり、
何も聞かなくなるというのは
ほんとうだろうか。
不在になった私の感覚の及ばないところで
それでも　秋の光が漿果を照らし
森の近くに住む子どもの小さな指が
それに触れるさまを想い描いてみる。
私はその子どもを知らないし
子どもは私がいたことを知らないだろう。

破壊し尽された瓦礫の上に　いつしか
人が戻って　新しい街には灯が点り、
すさまじい虐殺の記憶の滲み込んだ沙漠に
月明りの下　いつか草原がひろがり
遊牧の民のことばと笑いが砲弾のかわりに
飛び交うさまを想い描いてみる。
私は新しいその街をついに知らないし
草原は私がいたことを知らないだろう。

時が来て、世界からほんの一歩外れれば
私はもう何も見なくなり、
何も聞かなくなるだろう。
いつまでのことかは判らないが
それでも　朝の光のなかには
無数の生きものたちの目醒めがあり、
その裏側の夜の空には、星の群が
さまざまな夢の形象を描きながら
回転しつづけるさまを想い描いてみる。
私の知らない世界のいたるところで
私の知らない子ども　私を知らない
子どもが目醒めてはまた眠る。

晩秋の日に

音もなく一枚の葉が枝を離れる。
それからまた一枚、さらにまた。
「私たちは何処から来たのか、
そして　何処へ往くのか」と
自分に問うた昔の人は　みんな
彼らの知らないところへ去ってゆき
何処からかやって来て
いまここにいる人たちもほどなく
何処へか立ち去ってゆく。

マユミの実が紅くはじけて
季節の底まで青空がひろがっている。
「私たちは何処へ往くのか」と
問い糾す素振りもみせず
木の葉がゆっくりと中空を旅してゆく。
群れてゆくもの、ひとりだけのもの、
かすかに朱いろのもの、黄ばんだもの、
急ぎもせず、それかといって止まりもせず。

生起しては消滅してゆく
些細なこれらすべて、
申し分ないこの午後の陽射し、
明るくなった枝間の影の揺れ、
枯草のなかに身を潜める虫たち、
祝祭の宴にはげしく襲いかかる戦火、
束の間の壮大な文明とその没落、
これらすべてを　それでも記憶に
止めておきたいと思っているのか、
宇宙はやがて目を閉じる。すると
その奥深い内部の沈黙の何処かに

夢の開く気配が感じられたのか、
木々の葉がその夢に自らを委ねようとする、
急ぎもせず、それかといって止まりもせず。

旅立ち

詩だって？　それは何なの？
夏の終りの高い並木の枝先で　小鳥が訊ねる。
あれやこれやのものに　人が名まえをつけて
紙のうえに並べて置くと、それが詩なのさ、
ずっと下のほうで陽灼けした石が答える。

それで私たちはどうなるの？
小鳥がまた訊ねる。
べつに。どうもならないさ。
ひかっていた石はいまや雲の翳につつまれる。
名まえって何だろう？　詩だって？

鳥はあたりを眺めまわす。
そう　あれやこれやのたくさんのもの、
昨日はなかったのに　いまは
大きく、誇らしげに咲いているもの、
それからほどなく萎んで消えようとしているもの。

小鳥は旅立ちの日の近いことをふと想う、
自分の名まえがわからないままに
一声高らかに叫んでみせる、
山を超え、海を渡る道筋がわかっているのに
自分の名まえがわからない　と。

「燕が旅立ちの用意をしている」と詩人が書いている。